

# RETAILER ACADEMY NEWS

Jul 2022 | Bentley Motors Japan



## 世界で最もウェルビーイングにフォーカスしたシート エアラインシート スペシフィケーション

ベントレー EWBのオプションとして設定されているエアラインシート スペシフィケーションは、これまで自動車に採用されてきたシートとしては、最も先進的なシートです。22 way調整機構を備え、世界初採用のオートクライメート センシング システムと先進的な姿勢調整機能「ポスチュラル アジャストメント」も装備しています。これまでリアシートでの最高の快適性を追求するのは、ミルザンヌ以来です。

エアラインシート スペシフィケーションには、オートクライメートやポスチュラル アジャストメントをはじめとする先進的なテクノロジーを備えていますが、そのほとんどが手作業で仕上げられたレザーの下に隠されています。12個の静音モーターを内蔵し、シートだけで22通りの調整が可能。乗員は自分の体型に合わせたり、仕事をしやすいシートポジションに調整したり、リラックスできるポジションに調整したりできます。助手席の後ろのリアシートには、シートクッションとバックレストのボルスター調整機能、シートクッションの長さの調整、高さ調整可能な電動ヘッドレスト、展開・格納式フットレストが追加されます。VIPモードにより、助手席を前方に移動させることもできます。

### オートクライメート

世界初のシート表面温度を感知するシステムを備えており、このシステムが乗員とシートの接触面の温度と湿度を25ミリ秒ごとに0.1℃という精度で継続的に測定します。乗員は好みの温度を7段階(0、+1〜+3および-1〜-3の計7段階)から選んで設定することができます。センサーが測定したデータをもとに、乗員にとって最適な温度を実現するため、シートヒーターやベンチレーターのレベルを決定します。システム作動初期段階では、設定温度に速やかに達するようヒーターやベンチレーターが効率的に作動し、設定温度に達した後は、その温度を維持するためにシステムが微小な調整を常時行います。

オートクライメートで使用しているシートヒーターは既存の技術ですが、ベンチレーターについては新たにファンを開発し、従来のシステムより約80%も多くの空気を動かすことができるようになりました。消費電力はこれまでのクライメート システムよりも少なく、オートクライメート モードでは、乗員が手動で温度調整を行った場合と比べ、システム全体の消費電力は約40%少なくなります。

### ポスチュラル アジャストメント

シートマッサージなどの疲労軽減システムは、すでにさまざまなメーカーの自動車に採用されていますが、ベントレーのポスチュラル アジャストメントは、さらに一歩進んだ積極的な疲労軽減システムです。既存のアジャスタブルシートにありがちな2次元的な動きではなく、空気圧を利用してソフトな触感を実現し、体とシートの接触面の圧力を微妙に調整することで、3次元的なひねりを加えてツボを刺激することができるようになりました。

この動作の実現のため、ベントレーは専門家であるコンフォート モーション グローバル (CMG) と協力し、空気圧による科学的な姿勢調整システムを開発。CMGは数年前から疲労予防の研究を行っており、医学的な根拠に基づく研究と試験を繰り返し、姿勢の変化が快適さと健康に与える効果を明らかにしました。シートの接触面に微妙な変化を与えることで、圧迫されていた体の部分は圧力が緩和され、他の部分には新たに圧力がかかるようになります。姿勢が変わることで手足の角度に小さな変化が生まれ、血流を増加させることが可能となります。特に腰や下肢の不快感が軽減されるため、乗員はより長時間でも注意力と集中力を維持することができます。







# ラグジュアリーセダン初のBEVもラインアップ BMW 7シリーズ

BMWジャパンは、2022年7月1日に同社の最高峰ラグジュアリーセダンとなる新型BMW 7シリーズを発表。同日より販売を開始しました。納車開始は同年第4四半期を予定しています。

## SUMMARY

- 7代目に生まれ変わったBMWのフラッグシップセダン
- 全車がロングホイールベース仕様となり、ボディサイズを拡大
- 最上級モデルはBEVのBMW i7。従来のV12エンジン搭載モデルは廃止
- すべてのドアを車外および車内から自動で開閉する機能を搭載
- 31インチ8Kパノラマ仕様の「BMWシアター・スクリーン」を設定



## EXTERIOR

- フロントマスクを強く印象付ける大型キドニーグリルは、夜間にグリルの縁が点灯する機能を採用
- 新しいデザイン言語となる薄型のヘッドライトは、スワロフスキー製のクリスタルヘッドライトを採用
- ドアハンドルはドアパネル内蔵式を採用。空気抵抗の低減とともにすっきりとしたサイドデザインを実現
- リアは水平基調とL字型リアコンビネーションライトによる伝統的なデザインを踏襲
- ナンバープレートはバンパーレベルに移動



## TECHNOLOGY

- BEVのBMW i7は、前輪と後輪に電気モーターを搭載する4輪駆動モデル
- システム最高出力は544ps (400kW)、最大トルクは745Nm。0-100km/h加速は4.7秒
- リチウムイオンバッテリーの総エネルギー量は101.7kWh。走行可能距離は約600km
- BMW 740iには48Vマイルドハイブリッドシステムと組み合わせた3.0L 直6ターボエンジンを搭載。システム最高出力380ps (280kW)、最大トルク540Nmを発揮
- BMW 740dには48Vマイルドハイブリッドシステムと組み合わせた3.0L 直6ターボディーゼルエンジンを搭載。システム最高出力300ps (220kW)、最大トルク670Nmを発揮
- 駐車操作をアシストする「パーキング・アシスタント」、「パーキング・サポート・プロフェッショナル」を標準装備



## INTERIOR

- 12.3インチのメーターパネルと14.9インチのコントロールディスプレイを一体化させ、ドライバーに向けて湾曲させたカーブディスプレイを採用
- スイッチ類を最低限にとどめ、さらにクリスタルを多用することで、すっきりとした高級感を実現
- 先代モデルからガラス面積を約40%拡大させたパノラマガラスサンルーフを標準装備
- リアドアには、スマートフォンを操作する感覚で様々な設定が可能なタッチパネルを装備
- 後席で圧倒的なシアター体験が楽しめる、Amazon Fire TVを搭載した世界初の「BMWシアター・スクリーン」を設定



## PRICE

BMW 740d xDrive Excellence:	14,600,000円
BMW 740d xDrive M Sport:	14,600,000円
BMW 740i Excellence:	14,900,000円

BMW 740i M Sport:	14,900,000円
BMW i7 xDrive60 Excellence:	16,700,000円
BMW i7 xDrive60 M Sport:	16,700,000円



## BRAND STORY

## BMW 7 SERIES



1977年に誕生したBMW 7シリーズ。当時のトップモデルは3.5L 直6ターボエンジンを搭載したBMW 745i

## 革新により道を切り拓いたフラッグシップ

BMWの最上級ラグジュアリーセダンとして1977年に登場したBMW 7シリーズ。初代モデルは「世界一美しいクーペ」と呼ばれたBMW 6シリーズに似た流麗なスタイリングが特徴でした。堂々たるボディサイズでありながら、BMWにふさわしいドライバーズカーとして位置づけられ、ショーファードリブンの高級セダンとは一線を画す存在でした。

## ライバルを震撼させたV12エンジンの搭載

1986年に登場した2代目モデルでは、ロングホイールベース仕様を新たに設定。さらにドイツ車としては第二次大戦後初となるV型12気筒エンジンを搭載しました。5.0L V12 SOHCエンジンを搭載したBMW 750i/750iLにより、名実ともに世界の最高級セダンの仲間入りを果たしたのです。

このモデルは最大のライバルとなるメルセデス・ベンツSクラスに真っ向から対決するもので、メルセデス・ベンツ、アウディおよびフォルクスワーゲンがV型12気筒エンジンを開発するきっかけとなります。そして日本のレクサス LS400、インフィニティ Q45を含む最高級セダンの競争激化にもつながっていきました。



新開発の5.0L V12エンジンの搭載でライバルを震撼させた2代目モデル。V12エンジン搭載の750i/750iLは幅広のキドニーグリルが特徴だった

## ボンドカーとしても活躍

1994年に登場した3代目モデルはよりスタイリッシュなデザインとなり、巨大なボディで批判を浴びたメルセデス・ベンツ Sクラスとは対照的な存在となりました。1997年に公開された映画「007 トゥモロー・ネバー・ダイ」では、BMW 750iLがボンドカーとして登場。さらに同年にはBMW 750iLのホイールベースを250mm延長したストレッチリムジンのBMW L7が追加されるなど、多くの話題を呼びました。



映画「007」シリーズのボンドカーとなった3代目モデル。ホイールベースを250mm延長したストレッチリムジンのBMW L7もつくられた

## 物議を醸した4代目モデル

2001年に登場した4代目モデルの特徴はそのスタイリング。当時のデザインチーフ、クリス・バングルによる個性的なデザインは好き嫌いがはっきり分かれ、物議を醸した存在となりました。そんな思いきった革新的デザインを実現できるのがBMWの特徴。その伝統は最新の7代目モデルにも息づいています。



クリス・バングルによる個性的なデザインが特徴的な4代目モデルは、最高級ラグジュアリーセダン市場に一石を投じた

## HERITAGE

ベントレー モーターズは、6月24日に開催されたグッドウッド フェスティバル オブ スピードにおいて、ターボチャージャーを搭載したベントレーの誕生から40周年という節目の年を祝い、10台のベントレーによるパレードランを行いました。パレードランに参加した車両は、ターボR (1991年製)、アルナージ レッドレーベル (2001年製)、コンチネンタルR マリナー ファイナルシリーズ (2003年製)、ブルックランズ (2010年製)、ミュルザンヌ (2010年製)、コンチネンタル スーパースポーツ (2011年製)、コンチネンタルGT V8 S (2014年製)、コンチネンタルGTC S (2022年製)、フライングスパー S (2022年製)、コンチネンタルGT マリナー (2022年製) です。

ベントレーは40年前のジュネーブ モーターショーで、ベントレー史上初のターボチャージャー搭載の市販モデル「ミュルザンヌ ターボ」を公開。このミュルザンヌ ターボの開発にあたっては、当時の会長であるデビッド・ブラストーがチーフエンジニアのジョン・ホリングスにかけた「Let's have some fun (楽しもうじゃないか)」という言葉がきっかけになったと伝えられています。当時唯一のパワートレインだった6.75リッター V8エンジンにターボチャージャーを搭載したことで、自然吸気では200PSだった最高出力が300PSまで跳ね



上がり、ミュルザンヌ ターボは当時のフェラーリを凌ぐ加速力を手に入れました。ベントレーにとってはこの4ドアセダンが転機となり、ベントレーの性能をあらためて定義づけたことで、「プロワーの再来」などの見出しで報道されました。1985年には後継モデルのターボRが発表され、ベントレーの歴史に新たな1ページが刻まれることになったのです。

そしてこの40年間で、ベントレーのエンジンの大きな特徴である強大なパワーと圧倒的に余裕のあるトルクは、ターボチャージャーとは切っても切り離せない関係になりました。現行モデルに搭載されているW12、V8、V6エンジンはすべてターボチャージャーを搭載し、その恩恵を受けて驚異的なレベルの性能と効率性を実現しています。





# コンティニュエーション シリーズ第2弾 スピード6の“新車”を12台限定で製造

ベントレー モーターズのビスポーク部門であるマリナーはこのほど、クラシック ベントレーを蘇らせるコンティニュエーション シリーズの第2弾として、12台のスピード6を製造すると発表しました。コンティニュエーション シリーズは、オリジナルカーの功績を称えとともに、世界最古のコーチビルダーとしてマリナーが長年培ってきた技術を保存し発展させることを目的としており、4 1/2リッター「プロワー」に続き、戦前の自動車を蘇らせる2番目のプロジェクトとなります。

スピード6は、1929年と1930年にル・マンを制したベントレーを象徴するレースカーです。ベントレーが当時の世界最高水準の性能を証明しただけでなく、快適かつラグジュアリーでありながら、長距離を楽に移動できるというグランドツアラーのコンセプトを明確に示した車でもありました。今回のコンティニュエーション シリーズも、プロワーのコンティニュエーション シリーズを手掛けたマリナーのスペシャリストチームが担当。機械面はもちろん外観も当時のレースカーを忠実に再現します。

スピード6の新車を製造するにあたっては、マリナーのチームはまずオリジナルの設計図とオリジナル車両の詳細な分析を実施。そのうえで完全な3D CADモデルを作成しました。この過程で参考にした車両は2台ありました。

そのうちの1台である「オールドナンバー 3」は、ベントレーが1930年のル・マンにエントリーした3台のスピード6のうちの1台です。難しいレースでの試練を乗り越えて優勝した車両で、それ以来完璧な

状態で保存されてきました。現在も公道走行が可能で、デザインの詳細や今プロジェクトの参考となる貴重な情報源となっています。

もう1台は、今年4月にベントレーのヘリテージコレクションに加わったスピード6 (GU409) で、レースカーと同じ4シーターのバンデンブラ社製ボディを備え、同じ仕様にレストアされた1929年製のロードカーです。

スピード6 コンティニュエーション シリーズのプロジェクトは、先月英国で開催されたグッドウッド フェスティバル オブ スピードで、エイドリアン・ホールマーク会長兼CEOによって正式に発表されました。ホールマーク会長は、「プロワー コンティニュエーション シリーズのプロジェクトを通じ、マリナーのチームは信じられないほどの技術を得し、その車がお客様から好評を得たこともあり、スピード6にも敬意

を表する機会を得られたことは素晴らしいことです。歴史上重要な車自体はもちろん、クラシック ベントレーに携わることで得られる知識も合わせて守り、維持して、そして発展させることが重要です。スピード6はベントレーの103年の歴史の中で最も重要なモデルの1つであり、12台のコンティニュエーション シリーズは創業者W.O.ベントレーが手掛けたオリジナルと同じ価値があるものと考えています」などとコメントしています。



## スピード6とは？

1926年製の6 1/2リッターを改良した高性能バージョンがスピード6です。ウルフ・バーナート、ヘンリー・ティム・パーキン卿、グレン・キッドソンら「ベントレー ボイズ」によって1929年と1930年のル・マンで優勝した、ベントレー史上最も成功したレースカーとなりました。

パーキン卿が排気量を増やさずにスーパーチャージャーによるパワーアップを信奉していたのと対照的に、W.O.はパワーを増大さ

せるには排気量を増やすことが最善策であると考えていました。そこでW.O.は、4 1/2リッターの後継モデルとして、より大きなエンジンを新たに開発したのです。こうして誕生したエンジンが、ボア×ストロークが100mm×140mmの新型直列6気筒エンジンで、排気量は約6.6リッターでした。スミス製シングル5ジェットキャブレター、ツインマグネット、圧縮比4.4:1の基本形で、6 1/2リッターのエンジンは147bhp/3,500rpmを発揮しました。ロンドン北部のクリックルウッドの工場では362台が製造され、お客様が求めるボディ形状の要望に応じて長さの異なるさまざまなシャシーが作られました。





## AWARDS

# コンチネンタルGTとフライングスパーが ROBB REPORTの2つの賞を受賞



米国のラグジュアリー層向けメディアのROBB REPORT誌の名物企画「ベスト・オブ・ザ・ベスト」で、コンチネンタルGT Speedが「ベスト グランドツアラー」に、フライングスパー ハイブリッドが「ベスト インテリア」に選出されました。同賞は、ROBB REPORT誌が34年間にわたり、卓越したクラフトマンシップ、並外れた細部へのこだわり、各分野における完璧さの飽くなき追求といった側面において、他の追従を許さない存在を表彰してきた企画です。

コンチネンタルGT Speedは、同誌のカー・オブ・ザ・イヤー 2022にも選出されましたが、1952年のR-Typeコンチネンタルから受け継がれてきたグランドツアラーとしての性能やエレガントさなどが、あらためて高く評価された形となりました。フライングスパー ハイブリッドについては、103年にわたるレガシーを受け継いだ芸術的なエレガントさと卓越したクラフトマンシップおよびデザインが極めて高く評価され、2021年に同賞を受賞したフライングスパーに続き、2年連続での栄誉に輝きました。

ベントレー アメリカの社長兼CEOのクリストフ・ジョージスは、「コンチネンタルGT Speedとフライングスパー ハイブリッドの2車種が、ROBB REPORT誌の『ベスト・オブ・ザ・ベスト』に選出されたことは、ベントレーが販売する車の素晴らしさを証明しています」などとコメント。ROBB REPORT誌のポール・クロートン編集長は、「コンチネンタルGT SpeedがROBB REPORTのカー・オブ・ザ・イヤー 2022を受賞し、さらに今回ベスト グランドツアラーに選出されたことは、このモデルが持つ至高のパワー、ハンドリング、洗練されたインテリアが組み合わせられていることの証です」などと語っています。

## SUSTAINABILITY

# ベントレーがNFTの領域に進出 今年9月に208の事例を公開予定



ベントレー モーターズはこのほど、NFT（ノン・ファンジャブル トークン [非代替性トークン]）の領域に初めて進出し、今年9月に208本限定でNFTを投下する計画があることを発表しました。ベントレーでは、NFT領域への進出をWeb3.0プラットフォームへの包括的なアプローチの第1歩として位置づけています。ベントレーのNFTは、ベントレーのデザイン部門が制作したユニークなアートワークで、ホルダーの皆様には専用のアクセスと限定特典が提供されます。この最初の投下は、Web3.0エコシステムにおけるベントレーのオーナーシップを拡大して強化するための長期的アプローチという狙いもあります。

ベントレー モーターズのアラン・ファビアー取締役（セールス&マーケティング担当）は、「ベントレーのお客様は、オンラインでの活動で生計を立て、デジタル通貨で高級品を購入し、メタバースでビジネスを確立しています。ベントレーはこれまでお客様が情熱を注ぐ場所に関わってきましたが、今日ではデジタル マーケットプレイスが存在感を増しており、NFT資産を提供することと同義になってきました。NFTがアート自体とアーティストたちの地位を向上させてきたことを目の当たりにしてきましたが、同じことがラグジュアリーカーの分野でも起こり得ると考えています」などと語っています。

NFTに描かれるユニークなデジタルアート作品は、9月の投下後に公開される予定です。

## HERITAGE

# 世界最古のベントレーがマン島に帰還



ベントレー モーターズが所有する世界最古のベントレーであるEXP 2が6月25日、マン島TTレースのチームトロフィー獲得から100周年となったことを記念し、特別展示イベントのためにマン島に帰還しました。マン島の首都ダグラスにはこの日、78台のベントレーと当時のライバルカーが集結。1世紀前の車両が一堂に会し、一般の方やオーナーの皆様には膨大な数のクラシックカーをご覧いただく貴重なイベントとなりました。ちなみにこの日集結したベントレーだけでも、推定4000万ポンドを超える価値があるとされており、これらの車両がすべてそろうことは2度とないといわれています。

イベントにはダグラス市のジャネット・トメニー市長も出席し、「参加者と車両が生み出すエネルギーと情熱を見ることができて嬉しい」などと述べ、車両とオーナーの皆様には歓迎の意を伝えました。展示イベント終了後、オーナーの皆様は市庁舎に招待され、マン島の副総督のジョン・ロリマー卿と面会する機会も得ました。

翌6月26日にはパレードランを実施。100年前と同様に激しい風雨に見舞われ、快適なドライブとはほど遠いコンディションでのスタートとなりました。しかし、100年前とは異なり天候は回復。タフなコースとして知られるサーキットの村や山々、チェッカーカーブなどを、沿道の観客に見守られながらベントレー草創期の車両がマン島を一周し、出走した78台すべてがピットレーンに戻りました。

## BEYOND 100

# 女性向けメンタリング プログラム 第一期が成功裏に終了



ベントレー モーターズはこのほど、初めて実施したエクストラオーディナリー ウーマン メンターシッププログラムが成功裏に終了したことを明らかにしました。このプログラムは、次世代の女性の才能を刺激することを目的とし、英国及び中東の提携大学でエンジニアリングやデザイン、ビジネスといった分野で学ぶ女子学生を対象に実施。クルー本社には海外からの5人を含む計8人の一期生が招かれました。

クルーでは1週間のプログラムが組まれ、学生たちはベントレーの製造オペレーションのさまざまな側面を見学し、製品やビジネス戦略についても学びました。このほか、シニアリーダーやベントレーの早期キャリアプログラムの対象となっている研修生らとのパネルトークにも参加。セールスやマーケティングチームのスタッフに自らのプロジェクトアイデアを提案する機会も得ました。

ベントレー モーターズのカレン・ラング取締役（人事担当）は、「Beyond 100戦略の目標の一環として、特にSTEM分野を専攻する女子学生を対象に、ベントレーのビジネスと幅広いキャリアについて理解を深めてもらう取り組みを拡大しています。特に、学生の皆さんとお会いし、ベントレーが設定したビジネス上の課題に対し、学術的な見識をどのように生かしているかを拝見できたことを嬉しく思います。ベントレーはこの1週間で得た彼らの意見やフィードバックをもとに、アウトリーチ活動をさらに改善していきます」などと手応えを語っています。



# カーコネクティビティの今

クルマに通信機器を搭載し、これまでにない機能を実現するのがカーコネクティビティです。通信によってクルマと繋がることから「コネクテッド」などとも呼ばれます。昨今は欧州車だけでなく、日本車にも通信機器の搭載が進み、カーコネクティビティを使った、さまざまなサービスが実現しています。どのようなサービスが存在するのかを紹介します。



## スマートフォンで遠隔操作も可能

メルセデス・ベンツをはじめ、フォルクスワーゲン、BMW、MINI、アウディ、ボルシェなど、多くのブランドで採用されているのがスマートフォンのアプリ連携です。スマートフォンから車両情報を得るだけでなく、カーナビの設定など多彩な機能が用意されています。一部の車種は、アプリ経由でクルマのドアの施錠・開錠やエアコンのオン・オフなどを操作することもできるようになっています。また、EVやPHVは充電状況を把握したり、充電スポット検索、充電のコントロールもスマートフォンのアプリでできるようになっています。さらに、BMW、トヨタやホンダでは、スマートフォンをクルマの鍵に使う「デジタルキー」も実用化しています。



スマートフォンのアプリを利用して、車両データの把握から遠隔操作までが可能になっています。



スマートフォンをクルマの鍵として使えるようにするのが「デジタルキー」。セキュリティ技術の向上で実現しています。

## 通信でデータを更新するOTA

通信機器によってソフトウェアやデータを更新するのが「OTA：Over The Air」です。これまではカーナビの地図データなど、クルマ本体ではなく付属機器のデータ更新に使われていましたが、最近になってトヨタなどの日本車メーカーでは、エンジンなどクルマ本体のソフトウェア更新にもOTAを使うようになっています。今後、他メーカーにも広がるのが確実視されている技術です。



無線通信によってソフトウェアのデータなどを更新する技術を「OTA」と呼びます。

## 万一の事故に対応する緊急通報サービス

万一の交通事故や病気などが発生した時に、自動で事故や病気を知らせる機能が「緊急通報サービス」です。「SOSコール」や「ヘルプネット」などとも呼ばれます。エアバッグの作動などを検知して自動で通報するモデルや、車内ルーフ前方に「SOS ボタン」を設置して、そこで通報するタイプもあります。通報だけでなく、人間のオペレーターと通話する機能を備えることもあります。メルセデス・ベンツ、アウディ、BMW、MINI、ボルシェなどが実施。日本のすべての自動車メーカーも「ヘルプネット」を導入しています。ただし、全車種ではなく、一部車種となります。



万一の事故や病気の発生時に通報する機能が「緊急通報サービス」。「SOSコール」などと呼ばれることもあります。

## 対話形式での音声操作やサービス

近年、増えているのが対話式の音声操作です。スマートフォンに「hey, Siri」と呼びかけて調べものをするように、クルマに対話式の音声認識機能が備えられているのです。メルセデス・ベンツやBMWにはすでに採用済みとなり、カーナビの設定をはじめ、エアコンやオーディオの操作に使えるようになっています。また、日産の新型EVである「アリア」は、アマゾンの「アレクサ」にも対応。「アレクサ」が提供するサービスが車中でも利用できるようになりました。

## 世界的なエンターテインメント・アプリを利用

通信機能を利用してエンターテインメントのサービス提供も実施されています。ボルシェでは「ボルシェコネクト」のサービスの中で、一部車種向けに「Spotify」や「Apple Music」を利用できるサービスを実施しています。また、スマートフォンの機能をクルマのディスプレイに映し出す「Apple CarPlay」や「Android Auto」「MirrorLink」は、非常に多くのモデルで採用されています。